1　Everything is Yours

田中良佑
写真

あの頃何度か、彼女の持ってきた服で僕が女装をして、彼女がそれを撮るということをしていた。それが普通のカップルでもすることなのか、彼女や僕のフェティシズムやセクシュアリティなのかよくわからなかったけれど、2 人ともそれぞれ楽しんでいたと思う。そしてそのことは、思い出の一つとして心の片隅にあった。
それをもう一度、彼女にお願いしてやってもらうことにした。
衣装やカツラも彼女に一から選んでもらった。当時のように僕の部屋で。
僕と彼女の気が済むまで。

2　DO THE TIME WARP

齋藤はぢめ
video 6min38sec

7 年前に別れた恋人の写真や動画を今も消せずにいる。もう二度と見ることのできない魅力的な表情や仕草をしており、そこに映る彼だけは未だ私の恋人でいる。
カメラ越しの恋人にカメラ越しに会いに行き、過去を捻じ曲げ、未来を予想する。
感情や関係性を可視化する。何が変わったのか、何も変わっていないのか。

#1 昔あって 今は無い　昔無くて　今はある
#2 近い未来　彼が私に言う
#3 過去を捩じ曲げる　歌ってはいない歌を歌わせる

3　Fountain

田中良佑
写真冊子、便器、自室の布団、自室の枕

最近は仕事を辞めて、ぶらぶらしていた。
そして男性とのある出逢いと別れを想っていた。その経験を反芻していた。
こみ上げる、友情のような愛情のような想いの中にいた。
行き場のなさは日に日に降り積もり、口座の金も減っていく。
それでも溢れ出てくる何か、持て余す渇き。
現代美術の父とも言われるマルセル・デュシャンが云う。

“私はいつでも、どうやって生きて来たのかと聞かれます。
でもそんなことがわからなくても、なんとかなっていけるものなのです。”
「デュシャンの世界 (1978 年)」対話より
彼の言うようになんとかなるのか、わからない。
あの便器はいつどこで見ても、突き放すように、切ないほど白かった。
だから僕は今、この身体にこみ上げる” 想い “についての冊子を作ろうと想った。

4　暗闇のなかで

田中良佑
画用紙、コピー用紙、薬袋、ボールペン、ポスカ

出逢いアプリで出逢って初めて触れ合った男の子、タカシ。
もう連絡は取れなくなってしまって、彼のイメージがどんどん曖昧になっていくのを感じた。そんな彼のことを思い出そうとすると、それは網膜よりもむしろ、感触として手や身体に残っていた。
だから、紙を手の下に置いて、『部屋を真っ暗』にして目を閉じて、手の先で彼の感触、残像だけをなぞるように、色の付く道具を紙に走らせて、自分にとっての彼の肖像のようなものを描いておこうと思った。

5　クライマックス

齋藤はぢめ
ミクストメディア

動かすことで雪が降っている風景を楽しめるスノードームはまるで物語のクライマックスシーンの時を止めているようだ。
日常のクライマックスをスノードームに閉じ込める。

6　TO BE CONTINUED

齋藤はぢめ
鏡　400×740

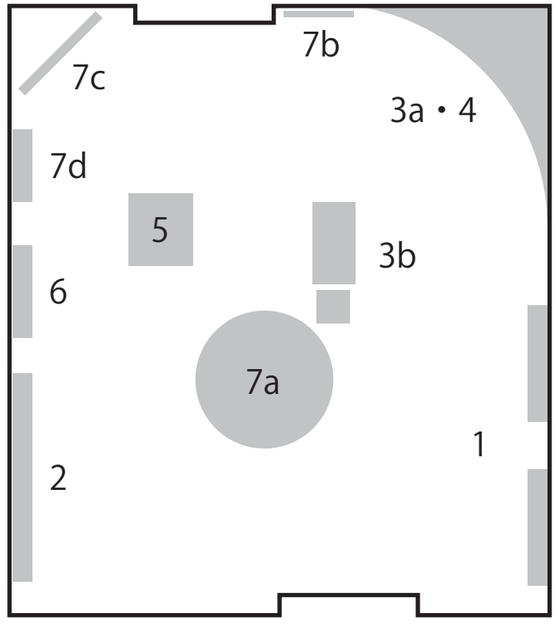
街を歩いているとふと自分の姿が鏡に、ガラスに映る。その度にしっかりと自分の姿を見つめてしまう。
世の中が物凄いスピードで変わって、好きな人はいなくなり、物語は終わりを告げていくけれど、自分の人生は淡々と続いていく。その姿をスクリーンに映し出された映画のように眺める。

7　Time to say good night

田中良佑 / 齋藤はぢめ 共作
天蓋、White album (Beatles)、テキスト、映像（7m30s）

あの頃、お互いに交換していた誕生日プレゼント。
その “思い出のもの” を持ち寄り、何かをしたいと想った。

だから私たちは、天蓋の中に 2 人だけで入って、White album の一番最後の曲を 2 人だけで聴きながら、2 人だけで踊ることにした。そしてその間は、絶対に目を逸らさないことにした。

あの頃よく眺めていた八王子の夜景は、
この世界でたくさんの人が同じ時間を生きていることを、知らせてくれる。
同じように喜びや悲しみが息づいていることを、知らせてくれる。

だけれど、天蓋の中ではそれらは星々のような光となってしまい、私たちはその時私たちだけになって、光の明暗の只中にいるようだった。